

〈玉の井〉の地政学

——永井荷風と地図（その2）

五 永井荷風と〈玉の井〉

永井荷風が〈玉の井〉を初めて訪れたのは一九三二年一月二二日のこと。定例となった中洲病院での診察後、清洲橋から南千住行のバスに乗り、途中で乗り換えて堀切橋で下車。荒川放水路の堤防を四ツ木橋方面に南下して〈玉の井〉に到着している。この日の『断腸亭日乗』の記述からは〈玉の井〉を目的地として出掛けたというよりはむしろ散歩中に偶然〈玉の井〉を〈発見〉した印象を受ける。

この荷風の初めての〈玉の井〉訪問がユニークなのは実際の街の表玄関である東武線玉の井駅や浅草雷門発のバスを利用したというのではなく、裏側ともいへば荒川放水路の堤防から〈玉の井〉にたどり着いた点である。いうならば〈表〉ではなく〈裏〉から〈玉の井〉に到着したのである。この日、一九三二年一月二二日の『断腸亭日乗』には「立寄りて女のはなしを聞くに、」とあり、「女」から聞いた街の様子が簡単に描写され、「江東の新開

地にて玉の井最も繁華なりと見ゆ」といった荷風の感想が記されている。^②

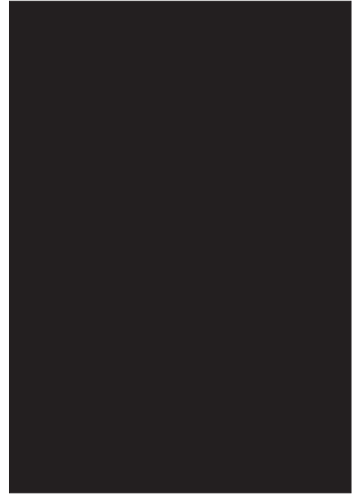
しかし、この初めての〈玉の井〉訪問は荷風にとってそれなりの感興を与えたようだが、街に通い詰めるほどではなかったようだ。この時期の荷風は街の詳細な様子を記すことよりも、もっとマクロな風景描写に関心を抱いていた。そのため荷風はこの日も荒川放水路が中央に流れるアングルで煙突が印象的な⑥「堀切橋より四ツ木橋を望む」と題するスケッチを残している。

このような荷風が連日のように〈玉の井〉を訪れるのはこの日から約四年後の一九三六年三月三十一日以降のことである。その頃の『断腸亭日乗』には浅草から〈玉の井〉へ向かう、つまり〈表〉から〈玉の井〉を訪れるコースが頻繁に登場する。四年前に初めて〈玉の井〉を訪れた時とは異なり、この時点ですでに〈玉の井〉へ行くことが目的となっていたことがわかるだろう。また荷風の関心も風景から〈玉の井〉の街そのものへと変化している。例えば一九三六年四月二四日の『断腸亭日乗』に「ぬけられます」の看板やハート型をした覗き窓が印象的な⑦「玉の井路地

嶋田直哉



▲図⑦「玉の井路地眞景」
（『断腸亭日乗』1936・4・24）



▲図⑥「堀切橋より四ツ木橋を望む」
（『断腸亭日乗』1932・1・22）

眞景」と題するスケッチが残されており、前述した四年前のスケッチ図⑥「堀切橋より四ツ木橋を望む」と比較してみれば風景を眺める視点が全く異なっていることが理解できる。

荷風が一九三六年三月三十一日以降、「玉の井」に通い出すようになってから、次第に街の様子を調査していく様子は、四月二日の『断腸亭日乗』に「稍陋巷迷路の形勢を知り得たり。然れども未精通するに至らざるなり」と記されていることから理解できる。また翌二二日には「玉井の記をつくる。」とあり、これが「溼東綺譚」（『東京朝日新聞』一九三七・四・一六―一五）のスケッチ的作品ともなった「寺じまの記」（『中央公論』一九三六・六）である。次第に荷風が「玉の井」を言語化する水準にまで理解を深めていることがわかる。

これら『断腸亭日乗』の一連の記述の中で、特に注目したいのは五月一六日に記載された「玉の井見物の記」と題する文章である。この「見物の記」の冒頭には以下の記載がある。

初て玉の井の路地を歩みたりしは、昭和七年の正月堀切四木の放水路堤防を歩みし帰り道なり。其時には道不案内にてどのあたりが一部やら二部やら方角更にわからざりしが、先月来屢散歩し備忘のために畧図をつくり置きたり。

そしてこの文章には荷風の詳細な観察をもとに描かれた図⑧「畧図」が付されている。「玉の井見物の記」はさらに以下のよう

路地口におでん屋多くあり。こゝに立寄り話を聞けば、どの家の何と云ふ女はサービスがよいとかわるゝとか云ふことを知るに更なり。七丁目四十八番地高橋方まり子といふは生まれつき淫乱にて若いお客は驚いて逃げ出すなり。七丁目七十三番地田中方ゆかりと云ふは先月亀井戸より住替に來りし女にて、尺八専門なり。七丁目五七番地千里方智慧子といふは泣く評判あり。曲取の名人なり。七丁目五十四番地工藤方妙子は芸者風の美人にて部屋に鏡を二枚かけ置き、覗かせる仕掛をなす。但し覗き料式円の由。

「路地口のおでん屋」が案内所の役割を果たしていること、そして傍線部のようにそれぞれの娼家が番地表示とともに記載されていることがわかる。この番地表示には前稿第三節で明らかにした寺島町の番地表示政策の成果が色濃く出ていることがわかる。前述した「寺じまの記」でも同じく以下のような箇所がある。

足の向く方へ、また十歩ばかりも歩いて、路地の分れる角へ来ると、また「ぬけられます。」と云ふ灯が見えるが、さて其処まで行つて、今歩いて来た後方を顧みると、何処も彼処も一樣の家造りと一樣の路地なので、自分の歩いた道は、どの路地であつたのか、もう見分けがつかなくなる。おや／＼と思つて、後へ戻つて見ると、同じやうな溝があつて、同じやうな植木鉢が並べてある。然しよく見ると、それは決して同じ路地ではない。

路地の両側に立並んでゐる二階建の家は、表付に幾分か相

違があるが、これも近寄つて番地でも見ないかぎり、全く同じやうである。

ここには「ぬけられます」の看板、「路地」そして「溝」といつた〈玉の井〉の表象をめぐるお決まりとも言える重要な要素が記載されている。荷風はそのような要素に注目して街を眺めていたために、どの風景も「同じやう」に見えたに違いない。それを区別するのは傍線部にもあるように街のどこどこに掲出されている「番地」表示であった。

このような点を念頭に置きながら前述した図⑧「畧図」を検証してみよう。図⑧「畧図」上部には「朱線ノ道路ハ両側トモ商店ナリ魔窟路地ノ内ハ迷宮ニテ地図ニ作り難シ路地入口丈ケヲ記ス路地ニハぬけられますトカキタル灯ヲ出ス」という荷風のコメントが記されている。「朱線ノ道路」というのは図⑧「畧図」で向かつて右側の部分に記された太線に見える道路を指す。またコメント中にも触れられている「ぬけられます」の看板、「迷宮」と呼ぶ「路地」、そして図⑧「畧図」中に散見できる「ドブ」の存在など、荷風がこの図⑧「畧図」を作成する際においても先述した〈玉の井〉の表象のお決まりともいえるパターンを踏襲していることがわかる。

また図⑧「畧図」の向かつて右側が北になっていることから地図の規則性を守らず個人的な「備忘」のために地図を作成していることがわかる。それゆえに荷風が何を基準としてこの地図を描いたのが明確に理解できる。荷風がこの地図を描くにあたって注目したのは図中向かつて右に位置する「京成バス通路」と記

された大正道路、中央に位置する点が多数描かれ「線路跡」と記された京成白鬚線の廃線跡（一九三六年二月に廃止）、そして図中「広小路」と記されている大きな道路——放射一三号線は〈玉の井〉である。図の左下を大きく横切るこの放射一三号線は〈玉の井〉の様子を中心に描くにしてはその道幅が不自然なまでに太すぎるだろう。それゆえなのか荷風の意識は放射一三号線の向こう側には届いていない。その証拠に図の左下には「六丁目魔窟ハ調査セズ」と記されている。つまり荷風は〈玉の井〉全体をくまなく「調査」しているのではなく、放射一三号線によって分断され限定された一画について「見物」し、「調査」しているのにすぎないのだ。

また図⑧「畧図」において〈玉の井〉の街の様子を具体的に描いた部分では細かい路地とともに番地表示が欄外にまであふれ出している。先述した「寺島の記」からもわかるように荷風が街を「調査」するのにこの番地表示を大切な指標としていたことが理解できるだろう。ここからは寺島町が徹底した番地表示政策の成果を荷風も大いに吸収しながら街を「調査」したことが理解できる。

放射一三号線による限定されたまなざしによる〈玉の井〉の認識、細かい路地を番地表示によって理解していくマッピング認識。放射一三号線が、そしてその道路建設に伴う番地表示の徹底がともに関東大震災後の都市復興事業の一環であることを想起すれば、荷風の〈玉の井〉へのまなざしは総じて都市復興の地政学的な力学によって構築されていたことが理解できるだろう。荷風が〈玉の井〉をみつめるそのまなざしは至って同時代的であり、関

東大震災後における都市復興政策の到達点をわかりやすく示し出してのなのだ。それではこの同時代性について「澤東綺譚」に拠りながらも少し詳しく検討してみよう。

六 「お雪」の家の位置——都市計画の中で

先述した番地表示は「澤東綺譚」にもさり気なく書き込まれている。

「何て云ふ家だ。こゝは。」

「今、名刺あげるわ。」

靴をはいてゐる間に、女は小窓の下に置いた物の中から三味線のバチの形に切った名刺を出してくれた。見ると寺島町七

丁目六十一番地（二部）安藤まさ方雪子。

「さようなら。」

「まっすぐにお帰んなさい。」（三）（章番号を示す。以下同じ。）

「わたくし」が初めて「お雪」の家を訪れ、その帰り際名刺を渡されるのだが、そこにはしっかりと傍線部のように番地が明記されている。この番地に位置する「お雪」の家の周辺がどのような雰囲気であったのかについては以下のような記述がある。

わたくしの忍んで通ふ溝際の家が寺島町七丁目六十何番地に在ることは既に識した。この番地のあたりはこの盛場では西

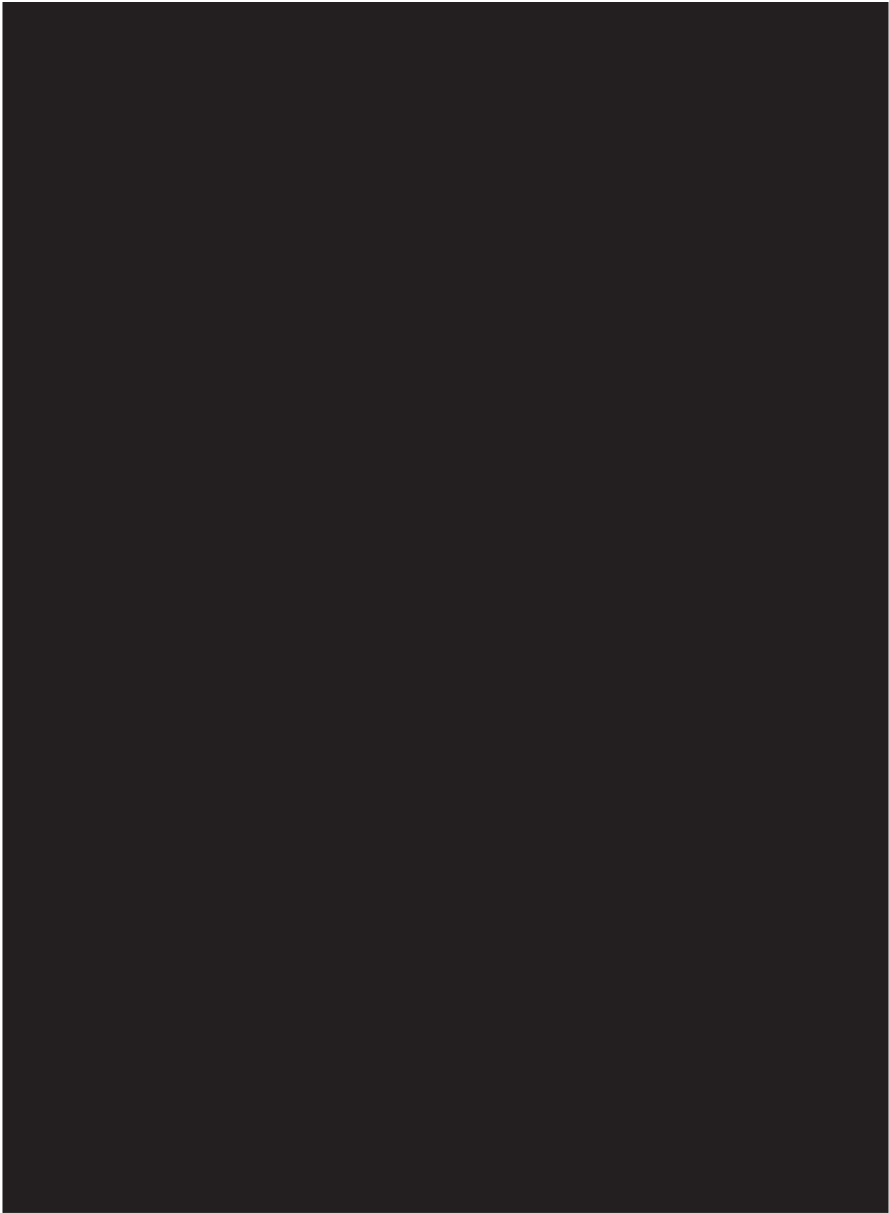
北の隅に寄つたところで、目貫の場所ではない。

（中略）

わたくしがふと心易くなつた溝際の家……お雪といふ女の住む家が、この土地では大正開拓期の盛時を想起させる一隅に在つたのも、わたくしの如き時運に取り残された身には、何やら深い因縁があつたやうに思はれる。其家は大正道路から唯ある路地に入り、汚れた轍の立つてゐる伏見稲荷の前を過ぎ、溝に沿うて、猶深く入り込んだ処に在るので、表通のラデオや蓄音機の響も素見客の足音に消されてよくは聞えない。（六）

傍線部にあるように「お雪」の家は街の「目貫の場所」ではなく、かなり「深く入り込んだ処」に位置している。それでは実際に当時の地図を参照しながら「お雪」の家の位置を確定してみよう。参照するのは図⑨「火災保険特殊地図」（都市製図社 一九三九・七）である。この地図は荷風が描いた図⑧「畧図」とほぼ同一の場所を対象としている。

まずはじめにこの地図の特徴を確認しておこう。この地図は「火災保険」のために製作されたものである。そのために番地表示が詳細でかつ正確である。逆に言えば寺島町の番地表示政策が徹底していたからこそ番地表示に基づいた地図を製作することが可能となつたといえるだろう。また図中上部に位置する大正道路、下部に位置する放射一三号線、そして左側に位置する京成白鬚線の廃線跡の二本の道路と一つの廃線跡によって地図の対象となる場所を切り出していることがわかる。さらに放射一三号線を下部



▲図⑨「火災保険特殊地図」(都市製図社 1939・7)
地図中に記入した注釈、記号は引用者(嶋田)による。

に位置させたために図中向かって右側が北の方角となり、一般的な地図の法則とは異なっている点も特徴的だろう。このような特徴は先に確認した荷風作成の図⑧「畧図」と多くの点で重なってくる。詳細な番地表示を書き込むこと、大正道路と放射一三号線と廃線跡による土地認識、図中向かって右側が北の方角であることなどこれら二つの地図は製作上の基準がほぼ同じと考えられる。つまり〈玉の井〉を番地表示に注目して作成するとき、自然とこれらの点によって土地が認識されると考えられるのだ。

それではこのような地図——図⑨「火災保険特殊地図」から「瀬東綺譚」に記されている「お雪」の家の位置を確定してみたいのだが、すでに詳細な住宅地図を使つての確定作業には先例がある。日比恆明調査・取材『瀬東綺譚』の世界が地図で再現。」

〔荷風——二三号 二〇一〇・三〕である。「お雪」の名刺に記された「寺島町七丁目六十一番地」は図⑨のAで囲んだところである。廃線跡脇の一面にあたる。後述するが前出の日比氏の調査もまた問題点を指摘しながらも同じくこの場所を「お雪」の家があった場所として指摘している。

ここで「わたくし」が「お雪」の家に至るまでの過程を図⑩「火災保険特殊地図」をもとに再現してみよう。先に引用した傍線部を参考にすれば「わたくし」は「大正道路から唯ある路地」を入り「伏見稲荷の前を過ぎ」て「お雪」の家にたどり着いている。ちなみに「伏見稲荷」の場所は図中B寺島町七丁目六五番地である。それゆえそこを目印にすれば、「お雪」の家の場所であるAがテキストにも記されているように「溝に沿うて、猶深く入り込んだ処」であることは容易に理解できる。

ただ問題なのはテキストの「溝に沿うて」という記述である。実際に「お雪」が「わたくし」に示した番地——図中A「寺島町七丁目六十一番地」の近くには「溝」が存在しないのである。図⑨「火災保険特殊地図」に拠れば、「溝」は伏見稲荷の前あたりで途切れており、「お雪」の家近くまでには流れていないのである。この番地では「溝の家」という表現とは相容れず、ましてや「お雪」が心配するような「溝があふれる」と、此方まで水が流れてくる」といった事態はまず起こりえないといつてよい。また前出の日比氏の調査によればこのAの地点は「民家がかった場所であり、銘酒屋は無かった」というように根本的な問題点が指摘されている。

この「溝」と「民家」の問題は実作者である荷風の記憶違いといった単純なことではない。なぜなら実際にこの箇所の「瀬東綺譚」の草稿(図⑩)を検証してみると「寺島町七丁目四十八番地」と一旦は記しながら、「四十八」を消しその隣に「六十一」と書き直しているからだ。ちなみに「寺島町七丁目四十八番地」というのは先述の「玉の井見物の記」に記された「高橋方まり子」の家であり、図⑨「火災保険特殊地図」と照合してみると、図中Cに位置する。「目貫の場所」とはいえないものの、〈玉の井〉の中心地で確かに「溝際」に位置していることがわかる。それゆえ「四十八番地」から「六十一番地」への書き直しは荷風の間違いではなく、明らかに故意的な操作であったことがわかるだろう。荷風が故意に「六十一番地」へ変更したのは「目貫の場所」ではなく、「大正開拓期の盛時を想起させる一隅」という場面設定が必要だったからだろう。そして「六十一番地」ならばあり得ない

「溝」の存在がテキストで印象的に描かれるのは、「溝」そのものが〈玉の井〉の表象体系において決定的に重要な事項であったからに他ならない。それゆえテキストでは「六十一番地」には本来存在することのない「溝」があたかも存在するように描かれていくのだ。また日比氏の調査が明らかにしているようにこの「六十一番地」が実際は「民家」であることもまた「目貫の場所」ではなく、「大正開拓期の盛時を想起させる一隅」という趣向を重視したからである。

従来「お雪」の家の位置は小針美男作成「『濃東綺譚』文学散歩の玉の井概要図」に代表されるように隅田バス車庫の裏あたり、**図⑨**「火災保険特殊地図」でいえば七丁目七〇〜七三番地と推定されていた。その理由として『断腸亭日乗』の記述、特に「玉の井見物の記」及び**図⑧**「畧図」などから荷風が足繁く通った娼

▲**図⑩**永井荷風『濃東綺譚 自筆原稿複製』(中央論社 1971・1) 4 行目に注目。

家周辺を「お雪」の家と推定していたことが挙げられよう。しかし本稿がこれまで検証してきたことから明らかなように「お雪」の名刺に記載された番地表示に従えば前述したいくつかの問題点はあるにしても**図⑨**「火災保険特殊地図」のAを「お雪」の家の正しい位置であると考えたい。

たった一軒の銘酒屋を番地表示によって示し出すことが出来るというミクロな水準における視覚化が、関東大震災復興後の都市政策というマクロな事業の達成度を示し出していく。このミクロとマクロの交錯こそ荷風が獲得した〈玉の井〉へのまなざしに他ならない。これらのことが「お雪」の家をめぐる一枚の地図からうかがい知ることが出来るのである。

七 〈玉の井〉の描写——文体の時間構成

本稿ではここまで荷風の〈玉の井〉へのまなざしが関東大震災後の都市復興事業の地政学的な力学によって構築されていることを検証してきた。それを受けて本節ではそのまなざしのありかたと荷風の文体との関係について分析を試みたい。ここで問題となるのは荷風が〈玉の井〉を同時代的なまなざしで捉えながらも、その逢着する地点が「むかし」であることだ。つまり〈玉の井〉を捉えるまなざしは関東大震災後の都市復興といった同時代性を帯びながら、そのまなざしで見えるものは旧懐的な「むかし」である、という形式と内容のネジレがおきているのだ。この点こそが荷風と〈玉の井〉の関係における最大の特徴といえるだろう。

このようなことを念頭に置きながら荷風の文体の時間構成につ

いて検討してみよう。以下「寺じまの記」における〈玉の井〉の描写である。

窓の女は人の聲音がすると、姿の見えない中から、チヨイト〜旦那。チヨイト〜眼鏡のおぢさんとか云つて呼ぶのが、チイト、チイトと妙な節がついてゐるやうに聞える。

この妙な声は、わたくしが二十歳の頃、吉原の羅生門横町、州崎のケコ口、又は浅草公園の裏手などで聞き馴れたものと、少しも変りがない。時代は忽然三四十年むかしに逆戻りしたやうな心持をさせたが、さう云へば溝の水の流れもせず、泡立つたま、沈滞してゐるさまも、わたくしには鉄漿溝の埋められなかつた昔の吉原を思出させる。

わたくしは我ながら意外なる追憶の情に打たれざるを得ない。

街中で聞えてくる「窓の女」たちの「声」を縁に傍線部「三四十年むかしに逆戻りした」様子が記されているが、注目したいのは「した」という単起的表現である。それに続く波線部「溝の水」からは「昔の吉原を思い出させる」とあり、こちらは文末が「」で括られる括復的表現が用いられている。つまりこの一文には一回的な出来事を語る単起的表現と「いつも」の様子を語る括復的表現が交互に用いられている。このような時間構成によって眼前に繰り広げられる「窓の女」たちの様子と「三四十年むかし」の様子が重ねられることが可能となる。このような時間構成は以下の「遷東綺譚」の箇所ですらにわかりやすい形で記されて

いる。

雷門からはまた円タクを走らせ、やがていつもの路地口。いつもの伏見稲荷。ふと見れば汚れきつた奉納の幟が四五本とも皆新しくなつて、赤いのはなくなり、白いものばかりになつてゐた。いつもの溝際に、いつもの無花果と、いつもの葡萄、然しその葉の茂りはすこし薄くなつて、いくら暑くとも、いくら世間から見捨てられた此路地にも、秋は知らず〜夜毎に深くなつて行く事を知らせてゐた。

いつもの窓に見えるお雪の顔も、今夜はいつもの潰島田ではなく、銀杏返しに手柄をかけたやうな、牡丹とかよぶ鬻に変つてゐたので、(九)

この箇所では主に前半を中心に波線部「いつも」という括復的表現が繰り返し用いられることによつて変化のない「伏見稲荷」「溝際に」「無花果」「葡萄」の様子が記されている。それとともに後半では「今夜」という物語内容のその時、その場を指示子によつて示し、その時制に合わせる形で「変つてゐた」というやうに「わたくし」の過去の一時点の一回的な行為を「した」を中心とする単起的な表現によつて語る。つまりここでの時間構成はかなり複雑で「いつもの」変わらぬ街の様子を括復的表現（波線部）によつて記し、それによつて時間的振幅が示されたあと、今度は「今夜」といった特定の一点が、その時その場の一回的な出来事を語る単起的表現（傍線部）によつて引き出して語られる構造になつてゐるのだ。この構造は「遷東綺譚」の末尾に付され

た「作後贅言」においても変わりはない。

わたくしは毎年冬の寢覚に、落葉を掃く同じやうなこの響をきくと、矢張毎年同じやうに、「老愁ハ葉ノ如ク掃ヘドモ尽キズ歎タル声中又秋ヲ送ル。」と言つた館柳湾の句を心頭（こころのうしろ）に思（おも）浮（う）べる。その日の朝も、わたくしは此句を黙誦しながら、寢間着のまゝ、起つて窓に倚ると、崖の榎の黄ばんだ其葉も大方散つてしまつた梢から、鋭い百舌の声がきこえ、庭の隅に咲いた石菫花の黄い花に赤蜻蛉がとまつてゐた。赤蜻蛉は数知れず透明な其翼をきら／＼させながら青々と澄渡つた空にも高く飛んでゐる。〈作後贅言〉

ここでもやはり波線部「毎年冬の寢覚に」「毎年同じように」以下の箇所で「わたくし」の「いつも」のように繰り返される習慣的行為が括復的表现によつて示され、そこで示し出された時間的振幅の一時点として「その日の朝」の出来事が文末の「つた。」とともに単起的表現によつて示されている。

このような括復的表现と単起的表現の踵を返すような時間構成は「澤東綺譚」全体を統括する語りの特徴といえるのだが、このやうな語りを採用することで昔から変わらぬ「いつも」の光景と眼前に繰り返り広げられる「今・ここ」の光景がごく自然に接続されることになるのだ。だから「わたくし」は眼前の「お雪」から「明治年間の娼妓」や「三四十年むかしに消え去つた過去の幻影」を連想し、さらには「群り鳴く蚊の声」から「昭和現代の陋巷ではなくして、鶴屋南北の狂言などから感じられる過去の世の

裏淋しい情味」(六)を感じ取つてしまうのだ。「澤東綺譚」が絶えず「郷愁」や「懐旧」といった言葉とともに読み解かれてしまふ原因はひとえにここにある。

結 〈文学〉への欲望

〈玉の井〉の成立を都市計画の歴史から考えてみたとき、放射一三号線と環状五号線といった二本の大きな幹線道路が織りなす交差点はまさに関東大震災復興事業の象徴ともいえる地点であつた。「澤東綺譚」の「わたくし」が初めて〈玉の井〉へ行くときに、浅草からバスに乗つて、まさにこの地点に降り立っている。また「わたくし」は〈玉の井〉を彷徨する際、この二本の道路によつて〈玉の井〉の「外廓」を認識しているのだが、それは同時に放射一三号線によつて分断された街の向こう側を切り捨てる行為でもあつた。このように「澤東綺譚」の「わたくし」は〈玉の井〉に対して同時代的な認識——関東大震災後の復興事業によつて裏打ちされたまなざしを投げかけていたことが理解できるのである。

このことは「澤東綺譚」の実作者である永井荷風においても変わりはない。「断腸亭日乗」に残された手描きの地図である⑧「畧図」からは放射一三号線、大正道路、京成白鬚線廢跡跡の三つを基準にして〈玉の井〉を切り抜いて認識している様子が理解できる。また細かな路地や番地表示が欄外にまで引き出されて大きく記されている様子はまさしく関東大震災後の復興事業はもちろんのこと、その延長線上として大東京編入のために寺島町が徹

底した番地表示の政策を大いに吸収している証拠といえるだろう。また特徴的なのは荷風が放射一三号線の向こう側を一切「調査」しておらず⑧「畧図」にもそのことが明確に記されている点だ。つまり荷風が〈玉の井〉を認識する（まなざし）は関東大震災復興後の都市計画が作り上げた地政学的な力学によって構築されたことが理解できるのだ。

このように荷風は同時代の状況と不分離ともいえるまなざし、さらにはいえば時代の尖端ともいえるまなざしを獲得しながら〈玉の井〉を描いていく。しかしこのような現代的なまなざしによって〈玉の井〉を捉えながらも、荷風が作品に書き込んでいく〈玉の井〉は「むかし」へと逢着していつてしまう。この〈まなざし形式〉と〈物語内容〉のネジレを許容するのは「いつも」の様子を示す括復法的表現と「今・ここ」の一回的な出来事を示す単起法的表現が踵を返すように用いられているからである。この時間的操作によって「いつも」と「今・ここ」の光景がごく自然に接続するのである。「澤東綺譚」が絶えず「郷愁」といったコードで読み解かれてしまうのはこのためである。

確かに荷風が記述する〈玉の井〉から「鶴屋南北の狂言などから感じられる過去の世の裏淋しい情味」①②を感じ、それを「荷風のテキスト」として〈文学〉主義的に称揚することは至って簡単なことであろう。しかし問題はこのような回路によって荷風のテキスト群を回収してしまうとき、これまで検証した荷風の同時代的なまなざしのありようを見失ってしまうことだ。

テキストを繕くとき求められるのはこのような〈文学〉的欲望を前に、それに抗いながらテキストに対峙することである。その

時テキストはこれまでとは異なる様相でわれわれの前に立ち現れるであろう。荷風のテキストが読み解かれる〈場〉はまさにそこ（了）にこそあるのだ。

注

(1) 川本三郎「澤東の隠れ里——玉の井」(同「荷風と東京——断腸亭日乗」私註)所収 都市出版 一九九六・九)は「奥のほうから玉の井を偶然のように見つけたところが興味深い。」(三九九頁)と記している。

(2) 「断腸亭日乗」の引用は「荷風全集第二十二卷」(岩波書店 一九九三・一〇)、「荷風全集第二十四卷」(岩波書店一九九四・一 岩波書店)に拠った。

(3) この日のスケッチを含む〈玉の井〉をめぐる画像については拙稿「ぬけられます」からぬけでるために——「玉の井」の画像学」(昭和文学研究 第四五集 二〇〇二・九)参照。

(4) 拙稿「〈玉の井〉の地政学——永井荷風と地図(その一)」(志学館大学人間関係学部「研究紀要」第三五卷 二〇一四・一)参照。

(5) 〈玉の井〉をめぐる表象については拙稿「消えたラビリンス——「玉の井」の政治学」(日本近代文学 第六四集 二〇〇一・五)参照。

(6) 前出(4)で指摘した図②「寺島町変更前字名略図」、図

③「寺島町変更後字名略図」の地図の向きと荷風の「畧図」は向かって右側が北という点においてほぼ同一の方向認識に

よって構成されていることが理解できる。

- (7) 永井荷風「溼東綺譚」〔東京朝日新聞〕一九三七・四・一六～六・一五、以下「溼東綺譚」の引用は『荷風全集第十巻』（岩波書店 一九九四・六）に拠った。

- (8) この「火災保険特殊地図」については日比恆明「玉の井色街と社会の暮らし」三九八頁（自由国民社 二〇一〇・一〇）に言及がある。日比氏は一九四三年製作の同地図を参照しているが、本稿では実際に荷風が「玉の井」を「調査」し、「溼東綺譚」を執筆した年代により近い一九三九年製作のものに参照した。

- (9) 日比氏は「昭和18年頃の玉の井住宅地図」と題して詳細な検討を加えている。参照されている地図そのものについては本文で触れられてはいないが前出(8)で掲出されていた一九四三年製作「火災保険特殊地図」と同一の地図と考えられる。

- (10) 一九三七年六月二〇日の『断腸亭日乗』には伏見稲荷の神官から送られてきた手紙が引用されている。その末尾に「寺島町七ノ六五」と住所が記されていることから伏見稲荷の位置も判明する。なおその手紙の内容は「玉の井の毛色の変わった小説的事件と人物を照会します」として一三の項目が記されている。新聞連載の「溼東綺譚」を受けたものと推測される。

- (11) 永井荷風「溼東綺譚 自筆原稿複製」(中央公論社 一九七一・一)

- (12) 「玉の井」をめぐる表象については前出(5)を参照。

- (13) 無署名「溼東綺譚の「お雪」を探る」〔日本読書新聞〕一九三七・九・五)で「記者」は「お雪さんのモデルは果たしてどんな女だらうか。」という問いから「玉の井」を歩き回るが、「これまた原作通りである。」「何も彼もそのま、だ」と本文との描写の一致に驚いている。この同時代評は「溼東綺譚」本文が記述する「大正開拓期の盛時を想起させる一隅」へ実際に足を運んでそのことを確認した例であろう。

- (14) 小針氏作成の図版は川本三郎「荷風と東京——『断腸亭日乗』私註」(前出)四〇〇～四〇一頁に挿入。

- (15) 本文でも触れた日比恆明調査・取材「溼東綺譚」の世界が地図で再現。(前出)もまた「六十一番地」が「民家」であるという事実から結局は従来の研究史同様に七丁目七〇～七三番地周辺を「お雪さんの店があったと推定される場所」と結論づけている。

- (16) 「寺じまの記」および「溼東綺譚」の文体的な特徴については前出(3)においてすでに言及したことがある。よって本論でも論旨が一部重複していることをお断りしておく。

- (17) E・バンヴェニスト(岸本通夫監訳)『一般言語学の諸問題』「代名詞の性質」二三四～二四一頁(一九六六)みずず書房 一九八三・四)。

- (18) このような時間構成については金子明雄「一人の「わたくし」・複数の「わたくし」——『溼東綺譚』の領域——」(『日本近代文学』第四八集 一九九三・五)が詳細に言及している。

- (19) このような受容の代表的な例として古屋健三「事実の夢

『溼東綺譚』の世界」(同『永井荷風 冬との出会い』(朝日新聞社 一九九九・一一)がある。古屋は「溼東綺譚」は喪失の秋を前にした短い夏の夜の夢物語といえるだろう。」(二七一頁)と述べている。

※本稿は拙稿「玉の井」の地政学——永井荷風と地図(その1)」(志學館大学人間関係学部「研究紀要」第三五卷 二〇一四・一)の続稿である。章番号、資料番号などは前稿の続きとした。あわせて読みたい。

また本稿は二〇一三年度日本近代文学会九州支部春季大会(九州大学伊都キャンパス 二〇一三年六月八日)に於ける口頭発表を發展させたものである。会場内外で貴重なご意見を頂きましたことをこの場を借りて感謝申し上げます。

なお本稿は平成二五年度志學館大学特別研究費による成果である。
(しまだなおや 志學館大学准教授)